

仲間と暮らしてをにもする。障害児の自立に向けた力を培う特別支援学校の寄宿舎。子ども達の発達を日常的に支える場を作り、発達させた。と指導員や保護者が願いを寄せ合いました。

「人と関わる力を培い、生活技術を獲得する。仲間と暮らしてをにもする寄宿舎は、障害児にとって大切な存在なんです」と話すのは、寄宿舎指導員として23年間子どもと向き合ってきた北海道名寄市立大学准教授の小野川文子さん。月末、東京都内で開かれた全国寄宿舎学習交流集会で、その教育的意義と指導員に求められる仕事について語りました。

全日本教職員組合障害児教育部の調査では、寄宿舎の設置校は全国で206校(2016年度)。ところが、新しい学校に寄宿舎を併設しなかったり、東京のように「財政的理由で減らしたり、発達保障とは逆の施策が広がっています。」

また、家族と同居する障害児が割合近くを占めるなど、親から離れたことができない実態があります。「環境を整えないまま、『自立』や『社会参加』などを求めるのは矛盾」と指摘しました。

1人暮らし
要求の最多

小野川さんは、13年に

守りたい 障害児の寄宿舎

人と関わる力培い 生活技術身に付く



寄宿舎での実践を学び合った分科会=7月30日、東京都内



小野川さん

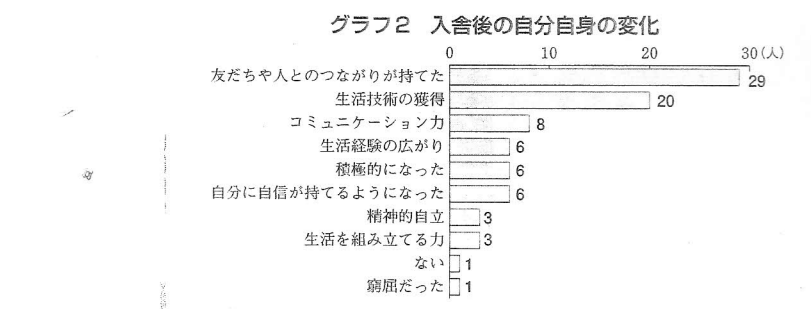
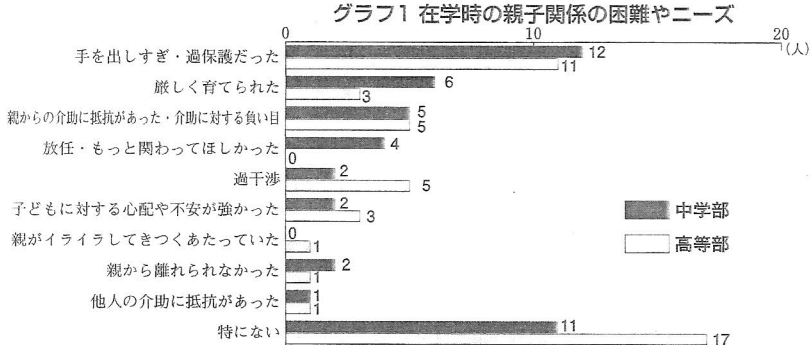
特別支援学校

保護者・指導員ら交流

実施した調査結果から見える実態を紹介しました。東京都内3校に在籍し、寄宿舎生活を体験した肢体不自由者50人から聞いたものです。

現在の生活スタイルは、半数以上が「親と同じ暮らし」を希望していることが目立ちました。「親はよかれと思っただけで、一生懸命に連れ出している。でも『本当は友達と自由に過ごしたかった』という子どもの思いが伝わって来ると、保護者も悩んでしまいます。『子どもが自立できるように、親がサポートする』という声も聞かれました。」

「独立」が30%、グループホームと施設がそれぞれ8%でした。在学時の生活士のニーズでは、高等部では「1人暮らし、親からの自立が最多に。1人暮らしという声も聞かれました。」



親子関係の困難やニーズについても「手を出しすぎ・過保護だった」「親からの介助に抵抗があった」「介助に対する負い目」といった回答が多くありました(グラフ1)。保護者に対しては「自分の趣味などの時間をもっとほしい」「もっとのんびり書かせてほしい」という声が多く聞かれました。一方で「保護者の自己満足」も指摘されました。

立を願っているとわかりました(小野川さん)。入舎後の自分自身の変化では、「友達や人とのつながりがもてた」(29人)、「生活技術の獲得」(20人)の順に(グラフ2)。寄宿舎生活を振り返ると、94%が今の自分にプラスになっていると受け止め、82%が「障害児に寄宿舎は必要」と答えました。

対等な関係
築きこく

小野川さんに「障害児にとって寄宿舎の意義は二つ。その一つは人と関わる力です。友達と一緒に過ごす経験が乏しい。介助する『介助される』という日常で対等な関係を築きにくいなか、親以外の人との関係が広がってこそ、精神的自立ができる」と強調します。

もう一つは、生活技術の獲得です。学校での生活訓練との違いは「生活の必然から身についていく」と小野川さん。『いろいろな生活をしたら、いろいろな生活をしたら』

という思いをふくらませなければ生き残りにならない。指導員の採用試験を実施しなかったために、臨時職員率が各地で高くなっています。正規職員の採用や賃金の改善、労働時間の短縮などの改善が待たなければなりません。『子どもたちが豊かに育つために、生活技術の獲得だけでなく、専門性を身につけた指導員の存在が欠かせません』